

2007 年度 修 士 論 文

江戸の都市空間における垂直性の表象
Representation of Verticality in Urban Space of Edo

千種 成顕
Chigusa Nariaki

東京大学大学院新領域創成科学研究科
社会文化環境学専攻

目次

0. 序	3
0.1. 研究の動機と目的	3
0.2. 論文の構成	4
1. 垂直性に関する象徴性	5
1.1. 世界の軸	6
1.1.1. 塔の形態	6
1.1.2. 中心の作られ方	7
1.1.2.1. 棒型	7
1.1.2.2. 山型	8
1.1.3. 日本における世界の軸	8
1.1.3.1. 山岳信仰	9
1.1.3.2. 柱信仰	10
1.2. 脱魂型と憑依型	12
1.2.1. 塔の上昇性と下降性	12
1.2.2. 風の天空指向性	13
1.2.3. 死後他界観と奥の思想	15
1.3. 本章のまとめ	17
2. 江戸の都市風景	18
2.1. 愛宕山から江戸を見た印象	19
2.2. 高さに関する法規	20
2.3. 町の表層	21
2.4. 視線の発散	21
2.5. シンボルの喪失	23
2.6. 江戸城の不可視性	24
2.7. 本章のまとめ	26
3. 江戸名所図会を利用した垂直要素の分析	27
3.1. 江戸名所図会	28
3.1.1. 名所とは	28
3.1.2. 江戸名所図会概要	28
3.1.3. 江戸名所図会の写実性	28
3.1.4. 江戸名所図会の写実的俯瞰図	29
3.1.5. 大衆を描いた大衆の為のメディア	30
3.1.6. 江戸名所図会のまとめ	30
3.2. 名所の類型と分析	31
3.3. スカイラインの分析	32
3.3.1. 分析方法	32
3.3.2. 分析	34
3.4. 象徴性に関する分析	41
3.4.1. 宗教施設における中心的建物の分析	41
3.4.1.1. 分析方法	41
3.4.1.2. 分析	46
3.4.2. 四面对称の建物の分析	47
3.4.2.1. 分析方法	47
3.4.2.2. 分析	48
3.4.2.2.1. 火の見櫓	48
3.4.2.2.2. 仏塔	51
3.4.2.2.3. 方形屋根をもつ建築	54
3.5. 本章のまとめ	64
4. 江戸の垂直性の形象	65
4.1. 江戸の垂直性の形象に関する作法	66
4.2. 作法の説明	69
5. 結	98
結	98
参考文献	100
謝辞	102

0. 序

0. 1. 研究の動機・目的

まず筆者は現在の東京のタワーマンションが乱立していく風景に興味を持った。それはニューヨークや香港で筆者が見た摩天楼のイメージとは違うものであると感じた。つまり、ニューヨークや香港では高い建物はある群を作って建っていたように記憶したが、東京のタワーマンションは群というより散逸的に建っている印象を受けた。このような無配慮とも言える都市風景の背景にどのような「日本人の高さ感」や「日本的高さの伝統」というものがあるのかについてはまとまった研究が行われていない。

また、本論文で江戸時代後期を扱った動機について江戸城天守閣の欠落を挙げたい。その60mにも及ぶ高さの天守閣は江戸において当初、堂々としたモニュメントであった。しかし、幕府が誕生した後わずか半世紀後に江戸全土を焼き尽くす大火で焼け落ちる事となり、その後再建が成されることは無かった。権力を維持する事は相変わらず重要な課題であった江戸幕府にとって、容易く天守閣の再建を手放した理由は大火で不足した金銭的な理由だけであったであろうか。筆者は、そこに疑問を抱いた。そうでは無く、江戸幕府が出来た当初と違って権力表象の手法が高さ表現を用いたモニュメントの建設では無くなったのではないかと思ったのである。しかし、西洋では依然高いものが象徴性を持ち続けていたし、現在の都市工学においても高層ビルに関する都市景観、スカイラインに対する関心は衰えていない。このような特異な都市環境が本研究の対象を江戸に決めるきっかけとなった。

当時の浮世絵や都市図、江戸の鳥瞰写真を見ると、現在の高層マンションが無作為に立ち並ぶような凸凹した都市風景とはまったく違う、均質で整然とした瓦屋根が続く水平的なランドスケープを見る事ができる。しかし、その風景はただ均質であったのではなく様々な空間文法や法律に乗っ取って出来上がったスケールの大きなデザインといえるであろう。

本論ではこのような立脚点をもって、そのデザインを都市景観というマクロな視点から物の形というミクロな視点まで、垂直性をキーワードに横断的に見る事で、江戸の都市空間において垂直性がどのような意味と形を持っていたか検討する事を目的としている。そのような物を研究することで、そこに隠された江戸の人の意識、例えば「高さに関する意識」や「モニュメンタルなものに関する意識」、「天に対する意識」などを明らかにする。また、このような事は現在の東京の都市環境を考える際にも、未だに確立されていない領域であるにも関わらず都市デザインにおける最も基本的な事柄である。

最後に、都市空間は垂直性であふれていると言えるであろう。垂直性はあらゆる物や空間に付随するものであるがゆえに社会的状況や思想の蓄積を表象する。それは物の形態を構成する成分である事を超えて、社会そのものを表象する観念でもあるのである。

0.2. 本論の構成

1章において研究の背景として、表象研究という性格上、垂直性の前提となる象徴性の性質について宗教学、民俗学を通して考察する。

2章では既往研究を参考に江戸の都市空間の垂直要素について考察する。

3章では『江戸名所図会』を用いてその中に描かれている都市空間における垂直要素について、図版を用いて分析する。

4章では、江戸の垂直形態がどのようなものであったのかについて検討し、江戸の垂直性の形象を13項目の作法という形でまとめた。それらの作法と常識的な物の垂直要素の作法を組み合わせれば、概ね江戸の都市空間における高さの構成原理が理解出来るようなものを目指した。

5章は、本論をまとめる。

なお、本論は都市空間を構成している物全般に関して研究対象としているが、過去の空間や物の研究という性格上、それらの存在を確定してくれるものは少ない。よって本論では数ある江戸時代の出版物の中から、「江戸名所図会」^(*)を主要な参考資料とし、3章、4章の分析に用いた。「江戸名所図会」の更に詳しい特徴は3章で述べる。

^(*)本論では、角川書店出版新版 江戸名所図会 上巻・中巻・下巻 : 朝倉治彦 / 鈴木 棠三 - 校註 を用いた。

1. 垂直性に関する象徴性

本章では、宗教学、民俗学の観点から垂直性の前提となる象徴性の性質について考察を行う。

- 1.1. では宗教学者ミルチャ・エリアーデの提唱した「世界の軸」について説明する。
- 1.2. では垂直性の運動的性質について検討する。
- 1.3. では以上の事をまとめる。

1. 1. 世界の軸

ここではまず、垂直性それ自体の象徴的現れである塔が、どのような形態的特性を持ち、そのモニュメンタルな象徴性を獲得するののかについて考察する事を論の導入とする。

1. 1. 1. 塔の形態

塔というものはほとんどの場合で四面对称もしくは正多角形平面や円形を建ち上げて全方位に対応する形態を作る事でその象徴性を高めている。そのような形態である事で垂直性を際立たせ、モニュメンタリティーを獲得する。江戸城天守閣においても同様の形態操作があった事は2. 2. 3. で述べる。以下にこのような形態の例を挙げる。

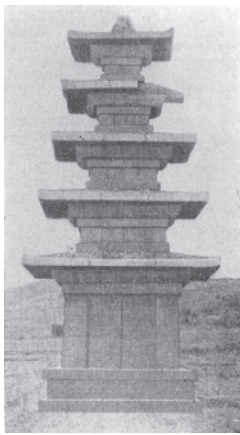


fig1-1-1-1 扶余の大唐平百
済塔



fig1-1-1-2 ニューヨーク・
オペリスク

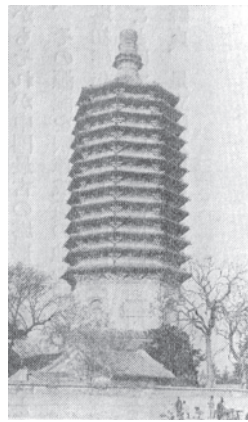


fig1-1-1-3 満州塔（北京天寧
寺）（以上『世界の古塔』 佐
原六郎より）



fig1-1-1-4 ウルム大聖堂
（『塔の思想』より）

このような求心的と言える塔の宗教的意味ついて、宗教学者のミルチャ・エリアーデは、伝統社会における<世界体系>の根幹をなす「世界の軸」として説明している。それは、

「(<世界体系>とは) すなわち

(a) 聖なる場所は空間の均質性の裂け目を表す。

(b) この裂け目は（天から地上へ [およびその逆]、地上から下界というように）、一つの宇宙領域への移行を可能にするところの<入口>によって象徴される。

(c) 天との交流は、柱（宇宙の柱）、梯子、山、樹、蔓等、様々の形象によって表現され得るが、それらはみな世界の軸に関係する。

(d) この世界の軸の周辺に<世界>（=我々の世界）が広がる。したがってこの軸は<中央に>、すなわち<地の臍（へそ）>にあり、それは世界の中心である。^(*)」

というものである。

ミルチャ・エリアーデ 風間敏夫訳：聖と俗、法政大学出版、1969^(*)^(*)^(*)

つまり、空間が聖なるものになる為には空間の均質性を打ち破る垂直要素が必要で、そのようなものの多くは天と地上を交信する媒体としての性質を持ち、そこから世界が広がるがゆえにそれは中心としての求心性を表象する。塔の多くが全方位に対応した形態を持っている事と、塔がエリアーデの言うような世界の軸としての中心性を持っている事は共犯関係なのである。

1.1.2. 中心の作られ方

全方向に対応した形態が作り出す垂直性を際立たせるという特性は、その塔の周辺の垂直物のあり方によって強められも弱められする。特に、垂直物が周りの環境に対して中心にあると我々が感じる時、その垂直性は更に引き立てられる。この中心とは「世界の軸」を意味するだろう。世界の起源として、また、カオス（外的世界）を清めるコスモス（内的世界）の起点として塔のような宗教的象徴性を持ったものは中心にあろうとするのだ。ここでは、塔が中心にある形式を「棒形」と「山型」の2種類に分けて以下に説明する。

1.1.2.1. 棒型

棒形とは、棒状の塔の周りに低い均質なものが取り囲んでいる形式の事である。バチカンのオベリスクは棒状の形態のオベリスクを広場の真ん中に置き、その周りを回廊で囲む事でその垂直性が引き立てられている。中心を取り囲む事で「塔が中心にある」という意味を強めている。仏塔である南京の報恩寺の旧磁塔においても、同様の事が言えよう。サマラの螺旋系ミナレットに至っては、より顕著に中心の塔は天の柱としての意味を持つ。塔が螺旋状になっており、マグダ・レヴィッツ・アレクサンダーの言う「動的」な上方指向性を表している。それについては1.2. で詳しく述べる。

また、西洋の教会の塔は必ずしも広場の中心に建てられていないが、正面に広場を持つ事で求心性を作り出しているもの

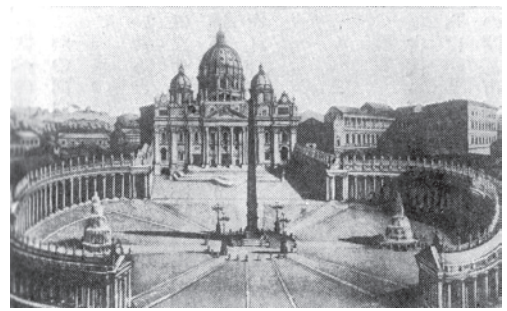


fig1-1-2-1-1 バチカン オベリスク

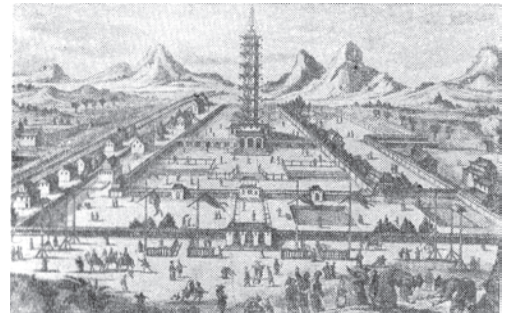


fig1-1-2-1-2 南京の報恩寺の旧磁塔

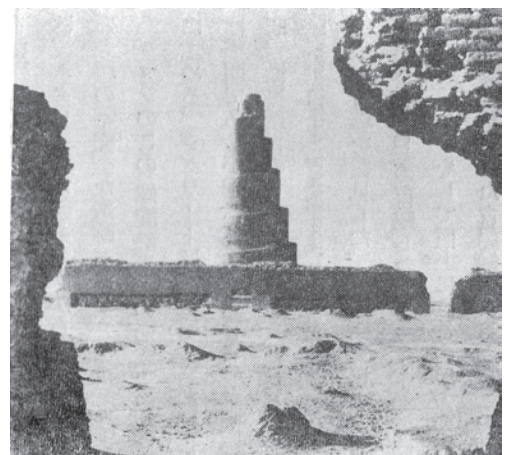


fig1-1-2-1-3 サマラ 螺旋状ミナレット
(以上、『世界の古塔』 佐原六郎より)



fig1-1-2-1-4 16世紀 ブルジェ
(『日本の都市空間』 都市デザイン研究体 より)

が非常に多い事を補足しておく。

1. 1. 2. 2. 山型

山型とは、山のように塔の根元は太く、上にいくほど通減していく塔の形式を指す。これもエリアーデの言う「世界の軸」としての中心性を持つものと言え、代表的なものとしてウルのジグラット、ジャワ島のボロブドゥール遺跡等を挙げておく。ジグラットはバベルの塔のモデルとされている塔で、fig1-1-2-2-1のジグラットは3層基壇状の形態をとっており、その正面に山の形態を思わせる階段がとり付けられている。

ボロブドゥール寺院は仏教思想の三界を表したもので基壇を欲界、方形壇は色界、最上部を無色界として表現されており、その塔を登る行程で俗界から禅定に達した世界へと移っていくとされている。エリアーデは以下のように述べている。「それ（ボロブドゥール）は人工の山として建てられている。その寺院に登ることは世界の中心に向かう法悦の旅である。^(*)」

他にも、メキシコのチェチェン・イツァ遺跡のピラミッドや日本の仏塔の原型とも言うべきインドのストゥーパ、北京の大正覚寺金剛宝座をここでは挙げておく。

以上、棒型の塔の形式と山型の塔の形式を説明したが、両者は共に周囲環境を従えていると言える。この事が、垂直性を強調する際に重要である。以下に垂直性が象徴性を高める時の要点をまとめる。

1. 全方位に対応した形態である
2. 中心に建てられている
3. 周りの垂直物を従える

1. 1. 3. 日本における世界の軸

日本にも上記と同様な「世界の軸」と呼べるものはあったのであろうか。ここで思い浮かべる事ができるのが日本古来から存在する山岳信仰と柱信仰である。



fig1-1-2-2-1 ウルのジグラット再現図
(wikipedia より)

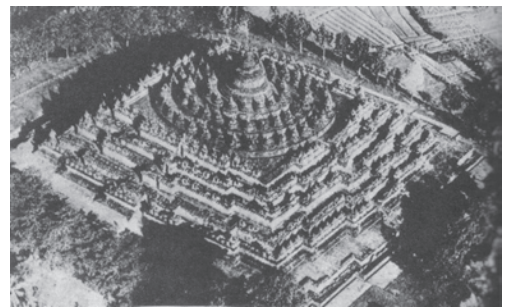


fig1-1-2-2-2 ボロブドゥール
(『聖と俗 塔と広場の思想』 梶谷善久より)



fig1-1-2-2-3 チチェン・イツァ - エル・カステイヨ (wikipedia より)

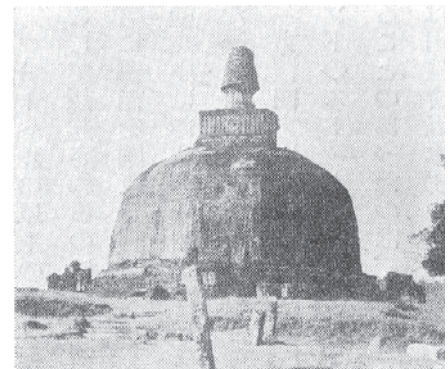


fig1-1-2-2-4 キリ・ダーガハ
(『世界の古塔』 佐原六郎より)

1. 1. 3. 1. 山岳信仰

「山もかくて世界の中心を具現する。(中略) 地と天を結びつける世界軸として、山はある程度天に触れており、したがって世界の最高点を示している。(*4)」

エリアーデは、多くの山も世界の軸として崇拝の対象になった事を述べていた。日本においても古代から山は信仰の対象とされてきたことは周知の事実である。現代人である我々でさえは富士山を見ると未だに聖的属性の印象を感じる事がある。その起源は縄文時代まで遡るといふ。

縄文時代は狩猟民を主体としているので山は狩猟という仕事の場であり恩恵を受ける事が出来る場所であったが、それはまた非常に危険な死がつきまとう場所でもあった。そのためそこに「畏怖」や「畏敬」の念が発生して信仰対象となったと考えられている。

弥生時代になると狩猟文化は農耕文化と変わり、山に対する信仰の在り方も変化する。稲作の導入により、山は田に水をもたらす場所であり、その事が山を畏怖よりも崇敬の対象とした。また農地を求めて開拓していく場でもあった事により、そこから山神になお密接な関心を抱き、より宗教的形態を成立させていった。その過程で、山は神々が宿る神奈備山として神格化されていき、ふもとに神社が創建され、背後の山を神体山として崇めるようになった。

以上が非常に簡単であるが山岳信仰の起源である。縄文時代と弥生時代で大きくその意味を変えながらも山は常に信仰の対象であった。

これをまとめた説として、堀一郎の山岳信仰の原型を「1. 火山への恐れ(火山系) 2. 源流地にあつて水を司る事(水分(みくまり)系) 3. 死後に人が埋葬された事(葬所系)(*5)」に分けて分析したものや、和歌森太郎の山岳信仰の成立契



fig-1-1-3-1-1 「富士曼荼羅」



fig-1-1-3-1-2 富士講 絵札 (以上『富士信仰と富士講』より)

鈴木正崇 : 山と神と人—山岳信仰と修験道の世界, 淡交社, 1991 (*5) (*6)

岩科小一郎 : 富士講の歴史, 名著出版, 1983

平野榮次 : 富士信仰と富士講, 岩田書院, 2004

機を「1. 山体の神聖視ないしは、そこに籠る神霊の存在の認知 2. 生業と関連づけて恩恵的存在とみる態度 3. 平地民とは異なり、特別な力を持つとされる山人への畏怖感^(*)」としたものなどがある。

そのような原始的信仰から近代に至る過程で様々な山岳信仰の形態が発生したが、ここでは江戸時代に隆盛した富士講と呼ばれる富士山信仰をとりあげ説明する。富士講とは、富士山やそこに住む神々を信仰する集団の事で、多くの信者が参拝に実際富士山を訪れた。また、富士塚というミニチュアの富士山を江戸の寺院等によって、実際の富士を詣でた代わりとする儀式も行った。fig-1-1-3-1-1は富士曼荼羅と呼ばれる富士信仰を説くもので、山の頂上に阿弥陀如来ら三体の神の姿が描かれ、登頂すると神との接近を予感させる絵となっている。また、「富士曼荼羅」に非常に多く描かれている雲は、天と地の接続点としての富士を引き立てるのに一躍かっている事も指摘しておく。

以上の事から、日本における山岳信仰は、1. 山を神とみる視点 2. 山に神が住むという視点 3. 山に神が降りてくる が存在していた事が明らかになった。

1. 1. 3. 2. 柱信仰

日本最古の柱に関する記述は古事記や日本書紀において確認できる。これら記紀神話によるとは、混沌から天と地が創造され、天の御柱（あまのみはしら）を中心に草木などの自然や神々が生み出されたという。ここでは世界が生み出された中心軸として柱が語られている。また、日本書紀では宮柱を岩盤より太く立てて天まで千木を高くそびえせしめたという、聖なる建物に関する記述（「宮柱底磐の根に太立て天高原に搏風峻峙りて（みやはしらしたついはのねにふとしまきたてたかまのはらにちぎたかりして）」）があり、ここでは屋根の千木が天と地を結ぶ軸として扱われている。

御柱という名称は出雲大社、伊勢神宮、諏訪大社などに名残りを残している。伊勢神宮には御柱（しんのみはしら）というものがあり、それは忌み柱とも呼ばれ、建物内部中央の床下に建立され御神体と並んで最も神聖なものとされる。心御柱は、神宮原初の頃の神籬（ひもろぎ）、すなわち神の依り代としての起源を持つと言われる。神宮が建物を持たなかった頃は、祭儀は神籬を通して行われていた。天と地を結ぶ高いものを通して神は降臨するとされ、神が降臨する依り代として柱が神聖視されるようになった。



fig1-1-3-2-1 元の心御柱と・桁

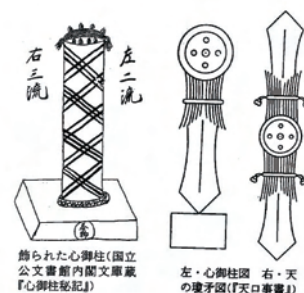


fig1-1-3-2-2 心御柱と天の瓊矛

(以上「民俗宗教における柱の信仰と儀式」より)

フランソワ・マセ : 日本における、森と聖域、『文化の多様性と通底の価値』, 麗澤大学出版会, 2007
 黒住 真 : 複数性の日本思想, ベリカン社, 2006

祭儀の際、依り代として柱を立てる風習は各地の民俗儀礼においても事例が確認される。各地で見られる4月8日の「天道花」の祭礼では、農作物の成長を願って山里から神を迎えるために、天道花（長い竿の先に野花を着けた長い竿）を庭や軒先に立てる風習がある。また、お盆の時期に長野や山口で見られる「柱松」では、空から降りてくる精霊の供養として、先端に御幣や榊などを付けた柱を立て、下から火を投げて点火を競うという行事である。これらも柱が神聖視された柱信仰の例としてあげることができよう。

神道において神を数えるとき一柱、二柱、のように柱で表すのも、柱が古代より神聖視されていたことで説明ができる。このように柱は神が降臨する媒介物としてだけではなく、神そのものとして扱われる場合もある。

以上、簡単に柱信仰について概観してみたが、山岳信仰においても柱信仰においても1. 対象を天と地を媒介するものとして見る視点、2. 対象に神が降りてくるという視点、3. 対象自体を神と見る視点、が存在していることがわかる。

1.2. 脱魂型と憑依型

本節では垂直性の上昇、下降といった運動的性質について検討する。

1.2.1. 塔の上昇性と非上昇性

マグダ・レヴィッツ・アレクサンダーはその著書『塔の思想』で塔の存在意義について以下のように述べている。

「塔は有用なものであり、われわれにとって絶対不可欠のものだといつてよいと思うが、実は単にそれにとどまるのではなく、実用建築物以前のものであり、非現実的な精神的目標をもつものである。^(*)」

彼女によると、塔は最も高さのある人口建造物でありながら、その建設根拠は非実用的な人間の精神性によるというのである。つまり、まず塔の象徴性は実用的な機能より先に人の精神性の現れを表す象徴機能を持っていると彼女は述べている。そして、その精神性を「高所衝動」、つまり自己の存在をより高い物として誇示しようとする態度、自己を超えようとする無限の衝動だとした。

「そこ（高所衝動）には精神性の、素材に対する意識されない永遠の戦いが表現されている。^(**)」

更に、アレクサンダーは、高所衝動によって生まれる塔は常に上昇指向性を内に秘めていてそれが形に表れるという。fig1-1-2-1-3の螺旋状ミナレットが顕著な例であろう。しかし、哲学者の梅原猛はアレクサンダーの述べる塔の非実用的側面に同意しつつ、「ヨーロッパの塔が限りなく上昇する生への意思を示すものであるとすれば、仏教の塔は、生と死とのたえざる争いの上に生まれる^(**)」と述べるように、高所衝動を原点とした西洋の塔と仏塔を



fig-1-2-1-1 バベルの塔



fig-1-2-1-2 キリスト昇天

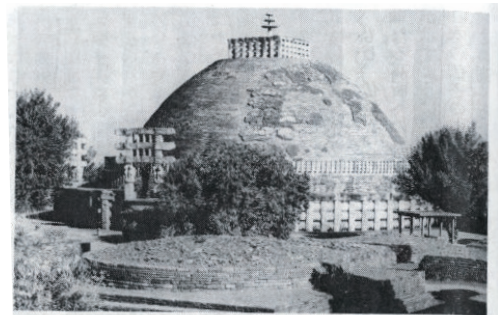


fig-1-2-1-3 アシユカ大王の墓



fig-1-2-1-4 仏陀涅槃図

マグダ・レヴィッツ・アレクサンダー 池井望訳 : 塔の思想, 河合書房新書, 1992 ^(*)^(**)
梅原猛 : 塔, 集英社文庫, 1985 ^(**)

上昇性の有無において差別化した。つまり釈迦の死を示す事で、「死を人間考察の中心においた仏教思想の表示」それ自体を塔は表しており、西洋の塔のような未完性を表していない。むしろ完成された輪廻の思想を塔の精神は内包しているといったことを述べている。そして梅原はこのような塔の精神を「水平を志向する意思」とした。右のように『キリスト昇天』と『仏涅槃図』を対比し、上方に昇天するキリストに対して仏陀の安定感のある最後の姿を隠喩として仏塔の精神を「水平を志向する意思」と説明する。アレクサンダー自身も、エジプトのピラミッドが上昇性を持たない理由を、エジプト人の生と死の「絶対不変」な価値観に見いだしている事からも、両者は塔の精神性を人生観や世界観、死生観から見いだそうとしている。

1.2.2. 風の天空指向性

宗教人類学の佐々木宏幹はシャーマニズムに関して脱魂型と憑依型という二つの型を以下のように説明する。

「脱魂型シャーマンは上昇的であり、自己（靈魂）を超自然的領域に向けて拡大させようとするのに対し、憑依型のシャーマンは下降的であり、自己に向けて超自然的領域を集中させようとする。前者は遠心的であり、後者は求心的である。人間が超自然（聖）的領域にかかわる仕方としての、かかる対照的な方向性は、とりもなおさず人間の精神、心理の構造に根ざした性格であるとともに当該社会・文化の構造とも関係していると言えよう。^(*)10)」

ここでの憑依型のシャーマンの考え方は梅原の仏塔に対する説明と非常に酷似している事を指摘したい。すなわち梅原その著作『塔』においての主張は、「脱魂」「憑依」という言葉こそ用いらなかったがまさしくアレクサンダーの考察した西洋の塔の脱魂的性格と仏塔の憑依的性格の差別化に他ならない。

梅原猛と同様、多田道太郎も日本の物の非上昇的性質について興味を持った一人である。彼は非上昇的性質を「脱魂型」シャーマニズムと「憑依型」シャーマニズムという二つの概念を用いて説明する。すなわち、『遊びと日本人』の中で、日本における「ブランコ」と「凧」を具体的に例に挙げて日本の憑依好み文化性を説明している。本論では特に江戸時代に大衆文化として大きく隆盛した凧について多田の言説とともに検討する。

「凧は地をはうものではなからうか。いや少なくとも、凧が地に落ちるところに、その妙諦があるのではないか。^(*)11)」という魅力的な仮説から論考は始まるように、多田の興味は、凧をいかに憑依型の呪術的性質を帯びた遊戯として位置づけるかであった。ちなみに多田は『遊びと日本人』を書いた後、「凧の謎」という論文において論考をより深めているのでここでの多田の仮説を以下にまとめた。

多田道太郎：遊びと日本人，筑摩書房，1994 ^(*)10) ^(*)12)

多田道太郎：日本人の美意識，筑摩書房，1978 ^(*)11) ^(*)12)

1. 日本の原始的凧が確認できる最古の書物は『日本書紀』で「鮪旗（たこはた）」とあり、これは他の地域の原始的凧同様、まじないなどの呪術的機能、「神意が地上にくだ」ったものであった。
2. 凧が大陸から輸入されたことは10世紀頃の書物『和名類聚抄（わみょうるいじょうしょう）』で、凧の中国名・紙老鳶（しろうし）という名が確認できる。しかし、実際凧を作って遊んだり、まじないにしたといった記録が一切無い。
3. 『和名類聚抄』のあと凧あげの実例が資料に表れてくるまで600年かかる。この空白の600年の意味は、脱魂的シャーマニズムの表現の要素の強い凧が憑依型シャーマニズムの国が受け入れられなかった。

というものである。紙は高価なものであり、庶民に普及するまでにはその後600年かかるといった別の説を唱える者もあり、これらの話の正誤は不明である。しかしその後、ようやく江戸時代に大衆に流行した凧が憑依的な性質の凧であれば多田の主張する理論はあながち無視できない事になる。ここで江戸時代の凧について説明する。

江戸時代に流行った凧の起源は長崎に入ってきた大陸の凧だと言われおり、そのような凧は遊戯目的のものであり、具象的な形態であったとされている。例えば婆羅門凧と言ったものであるが、それが江戸に至って独自の形態の凧、つまり江戸産の凧を作り出した。江戸独自の凧とは、主に奴凧と角凧の事であり、特に武者絵の描かれた角凧は非常に単純な矩形なのに世界的にみて例がほとんどない事は特筆に値する。おそらく江戸の町人にとってその特徴である描彩の自由さが憑依的なまじないを表す絵柄を描くのに適していたのではないか、というのが筆者の仮説である。逆に、具象的な鳥や蝶の形態はむしろ上昇的であり、脱魂的な凧であったので憑依的な性質の信仰心の強かった江戸の人に受け入れられなかったのではないだろうか。

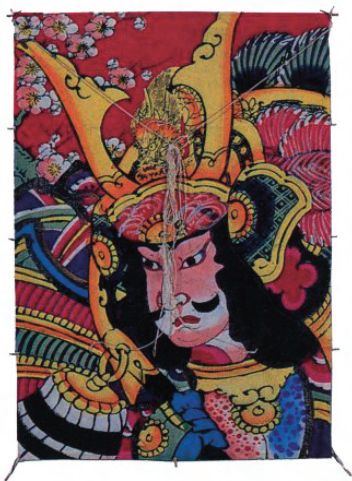


fig-1-2-2-1 角凧（義経）



fig-1-2-2-2 婆羅門凧



fig-1-2-2-3 マレーシアの凧

(以上『凧大百科』より)

比毛一郎 : 凧大百科 日本の凧・世界の凧, 美術出版, 1997
 斎藤忠夫 : 江戸凧絵史, グラフィック社, 1980

また、多田は日本の天空指向性の欠落や、憑依型の行動様式について多く言及しているので以下に数点挙げる。

「日本は天を目指す神話、伝説が少ない。世界の伝説、民話にはほうきにのった魔法使いや豆の木を伝って天に至ったジャックなど、天空指向の話がふんだんにある。」

「私たちは魂が天に向かって飛ぶという文化を後世にいたるまで持つことはなかった。そして、魂が抜け出るといふのをなによりも忌みきらっていたのが私たちの祖先である。」

「木の葉（神霊）は、我が国ではあがるのではなく、落ちるところに、神霊の妙があった。」

「「かごめかごめ」の遊びのように、人びとはかがんで神おろしを待つのである。「かごめ」は「かがめ」の転訛であるというのは柳田邦男の説であった。」

「日本では災いをなす神を天へ放つという習慣はない。チミモウリヨウは村はずれの鎮守の社に送るのがならわしである。」（以上^(*)12)

以上、多田道太郎の言説を中心に日本の憑依型シャーマニズムについて述べた。

1.2.3. 死後他界観と奥の思想

櫻井徳太郎は日本人が山に抱く信仰のうち、最も特徴的なものとして「山中他界観」を説明する。山中他界とは、山の中に他界があるとした考え方で、そのような他界観は「異郷的他界観」と「死後他界観」に分けられるとした。^(*)13)

異郷的他界観とは、閉鎖性の強い地域社会においてそこに発生する自己完結的なマイクロコスモスの範囲の外を異郷（カオス）とする他界観である。櫻井はこの他界観の特徴を、異郷を垂直的に天空にまで広げ、天空を他界とする事だと指摘する。そして、天空と地域であるマイクロコスモスを繋ぐものとして山を捉える傾向があるという。



fig-1-2-3-1 恐山 - 「死後他界観」

櫻井徳太郎 : 民間信仰と山岳信仰, 『山岳宗教と民間信仰の研究』名著出版, 1976^(*)13)

一方、死後他界観とは、人間が死ぬと霊魂がごく近くの山にのぼっていき、そこで鎮座するというもので、そのような山岳を一般的に霊山と呼び、他界と見なす他界観である。ここではむしろ霊魂は天へと上昇せず地にへばりつく。そして、山の中腹や麓にそれらを祀る祖霊祭祀の座を設ける憑依型シャーマニズムの形態をとる。このような死後他界観が作り出す空間特性を榎文彦は「奥の思想」のなかで言及している。

「山を背にして田園と家屋群が里を構成するという日本における村落コミュニティの原型は、奥の存在を図式的に示唆するものとして私は極めて重要なものであると思う。何故ならばこのような集落は往々にして山の下を走る街道筋に沿って横に長く配列されていて、周辺にひろがる耕地を管理している。それに対して直角に山裾の神社、さらに山奥の奥宮をむすぶいわゆる宗教軸が確立されているからである。ここで初めて奥は宗教性を方向というかたちで空間的に与えられたといつてよい。^(*)14)」

図式化された「村の構成」(fig-1-2-3-2)によると、宗教軸は山が始まる手前の御旅所から始まっており、この事から山と地域が垂直的というより水平的な関係を強くもっていたとみることが出来る。これに関しては、榎も『奥』は水平性を強調し、見えざる深さにその象徴性を求める」と述べている。このように、奥性の安定的で水平的な象徴性は、アレクサンダーが語る塔の「爆発的で」「変化の要素が固定化を、活動の要素が平静さを圧倒している」象徴性とはまったく性質を異とする。前述のように、アレクサンダーの塔はまさに世界の軸としての意味合いが強かったが、榎が「山の頂きにでなく山の奥に原点をみる思想」と説明する奥性には世界の軸としての象徴性は無かったのである。この事も、脱魂型と憑依型シャーマニズムの対比的視点で語れるであろう。エリアーデは「アジア的シャーマニズム(ここでは憑依型シャーマニズムの事)は、一つの古代的エクスタシー(脱魂)技術と考えねばならない。^(*)15)」と述べている通り、脱魂状態こそがシャーマニズムの本質的現象であると考え、憑依型は脱魂型シャーマニズムの二次的現象とした。そもそも「世界の軸」という概念には脱魂型シャーマニズムの表象として想定された概念であったという事である。

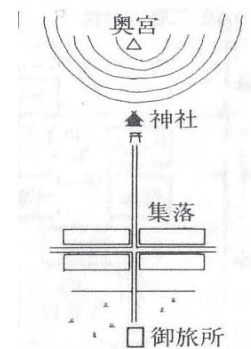


fig-1-2-3-2 村の構成
(『見えがくれする都市』より)

榎文彦 他 : 見えがくれする都市, 鹿島出版会, 1980 ^(*)14)

ミルチャ・エリアーデ 堀一郎訳 : シャーマニズム, 冬樹社, 1985 ^(*)15)

1.3. 本章のまとめ

以上、宗教学、民俗学の観点から垂直性の象徴性についてみる事で、垂直性が人の精神性や地域のシャーマニズムシャーマニズムの形態を表す媒体としての側面がある事を明らかにした。垂直性には上昇的な性質を表象する脱魂的な垂直性と高さを抑え下降的な性質を表象する憑依的な垂直性が存在する。この二つは対概念であり、それらの対比を左に掲載する。日本はこの二つの概念を両方とも持っていた事を示したが、日本が憑依型の精神性をより強く持っていた事は明白である。この事が、日本の都市空間少なからぬ影響を及ぼしている。

脱魂型シャーマニズム	憑依型シャーマニズム
上昇性	下降性
垂直性	水平性
遠心的	求心的
発散的	集中的
無限性を前提とする	有限性を前提とする
具象形態の凧	矩形の凧
異郷的他界観	死後他界観
山頂	山の麓、中腹
教会の塔	仏塔
『塔の思想』	「奥の思想」

2. 江戸の都市景観

本章では既往研究を参考に多角的に江戸の都市空間における垂直要素について考察する。

その主な項目は、江戸に関する「町を俯瞰した際の印象」「法規制」「町の表層」「都市構造」「城」である。

2.1. 愛宕山から江戸を見た印象

幕末の江戸の都市風景を最も端的に示した現存する写真は、1863年頃に愛宕山からフェリーチェ・ベアドが撮った「愛宕山から見た江戸のパノラマ」であろう。フェリーチェ・ベアドは、幕末横浜で高名な外国人写真家で、彼自身当時の風景を以下のように回想している。

「われわれの目は大きな都会に注がれた。まず、南の茶店に入ったが、何よりも風景の広いことと。その輝きに目をみはった。太陽は雲のない空に沈みかけている。大気が澄みきっているので、湾のきらきら光る海面に、台場がはっきり眺められた。しかし、小山の下に、湾からずっと広がっている空間の眺望は、どこまでも続いて、果てしがない。長い道路と、白壁と、灰色の大海といった方が当たっているであろう。もし、ここかしこに、美しい、黒い樹木のかたまりとか、または、寺院の破風が人家の波打つ線の上に、大浪のように飛び上がっているほか、この風景の単調をこの風景の単調を破るものは破るものは何もない。(中略) 北の茶屋からの景色は、いわば、いっそう一本調子で、大名ばかりが住み、城の石垣と木の茂った庭園までずっと続いている。^(*)16)」



fig-2-1-1 愛宕山より見た江戸のパノラマ 部分 (F. ベアド写真集〈1〉幕末日本の風景と人びとより)

ベアドの目には、江戸が樹木と寺院の大屋根を除けば果てしない「灰色の大海」として平に見えた事をこの回想は語っている。木下によると(注)、同時期の出版物である「江戸名所図会」や「江戸繁昌記」においても、「薨をつらねて所せく」、「楸秤」=基盤、「田疇」=田畑といった「灰色の大海」と同様の意味の言葉で愛宕山からの鳥瞰的風景を語る記述があるという。

エメェ アンペール 高橋邦太郎訳 : アンペール幕末日本図絵

木下直之 : 屋根の上のつくりもの、『講座日本美術史5』東京大学出版, 2005^(*)16) ^(*)19)

明治初頭に、エドワード・モースにおいても東京の景観について、「屋根面が織りなす広大な海」と形容している^(*)17)。つまり、多くの者が江戸の町を鳥瞰的に見るとき、平たい印象を受けたのである。実際の写真を見ても、確かに大海のようである。かろうじて突き出ているものとして、樹木、火の見櫓、寺の破風がある。

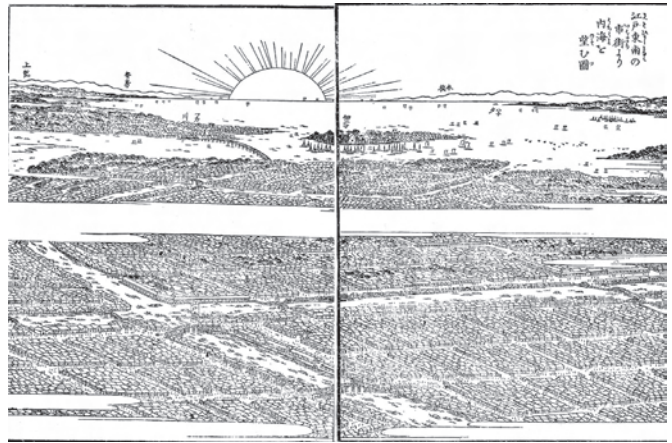


fig-2-1-2 江戸東南の市街より内海を望む図（『江戸名所図会』より）

2.2. 高さの法規制

このような景観が出来上がった背景には当然、法規制が存在する。江戸には階数規制、高さ規制ともに存在していた。

階数規制の制定は比較的早く、慶安2年（1649）頃、町中に”三階仕間敷事”として規制された。これは3階以上の建築を新築で建てる事を禁止する令である。当時、江戸屏風図等に描かれているように多くの3階建ての建物が確認できる。このような既存の建物を変更させる強制力は無かったと思われるが、7年後の明暦の大火によって結局大半の三階建ては消滅し、「復興なった寛文期の江戸の景観は、従来の1〜3階が多様に展開する景観から2階までの比較的整った状景へと移行した^(*)18)」ようである。最終的に江戸時代の最終年の前々年、慶応2年にこの規制は解除される事となる。その背景には混沌とした都市の過密問題があった。

高さ規制が制定されたのは階数制限より遅く、文化3年（1806）に2.4丈（7.27m）と定められるまでは、”家作可成たけひきく建候”や”高さの儀梁間に准じ……”等といった曖昧な制限しか存在しなかった。

ベアドと同時代に来日していた外国人であるアンベールが「すべてが同じ時代で、同じ様式となっていて、大君の治政の基盤、すなわちただ一つの政道に、ただ一つの既成事実にあじているのである。^(*)19)」と指摘した江戸の景観はまさにこれらの厳しい法規制が作り上げたものだと言えよう。

エドワード・モース：日本のすまい・内と外，鹿島出版会，1979^(*)17)

水野耕至嗣：江戸の都市構造におよぼした法的規制^(*)18)

水野耕至嗣：法制史から見た近世都市

2.3. 町の表層

ベアドの『愛宕山から見た江戸のパノラマ』には手前にはほとんど武家屋敷が写っている。これは当時の愛宕山付近が武家屋敷が密集する地域であったからである。地形と対応しながら長い塀で敷地を覆い、街路から内部を秘める町並みが、いわゆる山の手の町並みである。家の門は特別象徴的に作られているが、内部の家を外部に対して強調してみせるという事は無かった。大きな武家屋敷ほど建物は奥に隠れ、わずかに樹木が境界を越えて現れるにすぎなかったのだ。

一方、下町は平地に碁盤の目状に町があり、外側の商店の建物が裏長屋を取り囲むという、山の手の武家屋敷とは対比的に高密度な状態にあり、この場合においても一つの建物が特に目立つという事は、火の見櫓を除いてはなかったと思われる。槇は『<ひろば>と<にわ>』のなかで以下のように述べている。

「江戸期に都市史を繙いて気がつくことの一つに、ヨーロッパ的ないわゆるパブリックな施設がきわめて少なかった、というよりも城とか寺社を除けばほとんど皆無であったということである。(中略)奉行所、寺子屋のような本来パブリックな性格をもった施設も独自のビルディング・タイプとしての形態の発展はまったく無く、すべて屋敷の変形として処理されてきた。劇場も町人町の中にあっては、町並みを形成する道に沿った表層部分では周辺の町家と高さ、スケールなど何ら変わることなく、中に入って始めて劇場として相応の空間がしつらえているにすぎなかった。^(*)」

これは通常の建物に関してもその外観に個性が少なかった事を述べている。それを補完する物として、のぼりや店の看板などが豊富に存在した。江戸では建築などの形態といったハードウェアではなくて、門、のぼりなどのソフトウェアで建物の内部のプログラムやその施設の品位などを表象していたのだ。

2.4. 視線の発散

江戸の町が地形に富んだ山の手と、碁盤状の下町で構成されていることは前節で述べた。本節ではそれがどのように構成されているかを説明する。

内藤によると^(*)、江戸は江戸城を中心とした、「の」の字型＝右渦状の堀が巡らされたれ城下町であった。そして、その渦と交通の要所がぶつかる場所にそれ相応の大きさの門型の見張り所である見附が置かれていく。この都市構造は次頁に掲載されている図に示されている。

陣内秀信：東京の空間人類学，筑摩書房，1985

大野秀敏：視線の場としての都市

横文彦：<ひとば>と<にわ>，『記憶の形象 都市と建築の間で』，筑摩書房，1992^(*)

西洋建築史家の桐敷真次郎は、下町の町割りが富士山や筑波山が正面にくるような軸に向いているという仮説を唱えている。実際江戸のメインストリートである本町通りにおいて、道の先にはランドマークとしての富士山がある構図の絵は『江戸名所図会』、『江戸名所百景』における駿河町の景観において確認することができる。そもそもヴィスタは西洋的な概念であり、都市の軸線の先はオペリスクや広場、教会など Monument がくるのが一般的であるが、江戸においては江戸城という存在があるにもかかわらず山を向いていた。これは富士山をシンボルとして眺めることが、江戸城を眺めることより優先すべきことであったことを示している。大野は日本では建築物より屋敷の中にある外部空間や塀、門の方が永続性がある事に注目し、「周縁自体が都市の中であって Monument の代替機能を果たす^(*)22)」と述べている。また、後にも述べるが、江戸後期に花開いた名所文化のなかで名所とされた場所の多くは都市空間における境界部や都市の周縁部、橋や坂、墓、水辺や山にある事も関係がない訳ではないであろう。

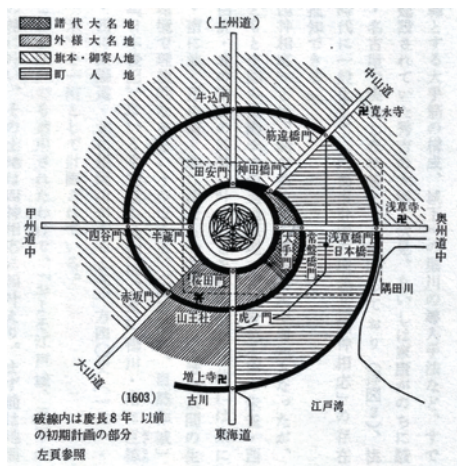


fig-2-4-1 内藤 昌 (『江戸と江戸城』より)



fig-2-4-2 江戸御城より方角絵図 部分 (中井忠重氏蔵)



fig-2-4-3 『駿河町』 (広重 『名所江戸百景』より)



fig-2-4-4 『駿河町三井呉服店』 (『江戸名所図会』より)

大野秀敏 : 周縁に力がある (*22)

内藤昌 : 江戸と江戸城, 鹿島研究所出版会, 1966 (*21)

2.5. シンボルの喪失

まず、日本の城が都市のシンボルとなる事自体は特別な事ではない。伊藤は、『都市の空間史』において城が戦闘の砦から都市のモニュメントとしての意味を併せ持つようになった最初の例として安土城を取り上げている^(※23)。安土城は山上に壮麗な天守閣を中心とした城郭として建てられたと考えられている。宮本雅明は天守閣について、関ヶ原の戦い（1600）以前と以後の二つの型を提案している。前者を目抜き通りを直接大手門に向かう「縦町型」の城下町に対応した、眺望を重視した「望楼型」の天守、後者を目抜き通りが大手門と平行する「横町型」の城下町に対応した、四方から眺められるランドマーク性・装飾性の高い「層塔型」の天守と位置づけた。「層塔型」は右図にもあ

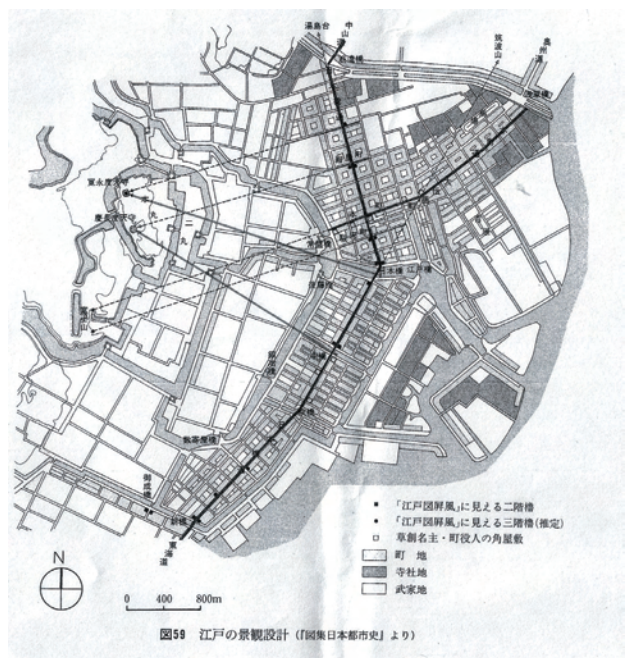


fig-2-5-1 江戸の景観設計（『図集日本都市史』より）

るように橋の上などから眺められ、それを見る画角が柔軟で多くの方向からの視角に対応する天守であった。城がランドマーク性をもつという事実は現存する近世の城を見ても当然の事として納得できる。ここで本論が問題視しているのは、これから述べる天守閣喪失という出来事についてである。

そもそも江戸城の天守閣は権力の象徴として見られることを想定して建てられた。焼失前に存在した江戸城天守閣は、装飾性の高い層塔型であると言える。そこに江戸城をシンボルとして機能させようという意思を見いだす事ができるであろう。安土、大阪城の天守閣の最上階の外に取り付けられた縁、高欄が江戸城には存在しなかった事から、天守閣から眺めることより、統一感を重視していたことが fig-2-2-3-2 からわかる。

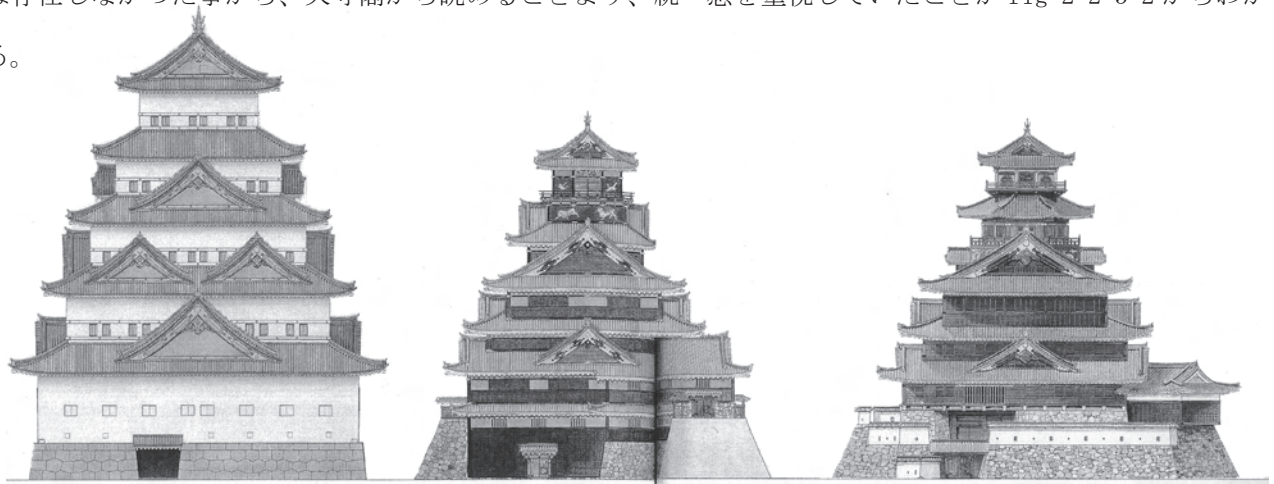


fig-2-5-2 左から、慶長度江戸城天守 ・ 大阪城天守 ・ 安土城天守
 (『歴史群像 名城シリーズ 江戸城』より 復元考証・作図 宮上茂隆)

伊藤毅：都市の空間史，吉川弘文館，2003 ^(※23)
 歴史群像 名城シリーズ 江戸城，学習研究社，1995

そのシンボルである天守閣を幕府は明暦3年（1657）、明暦の大火（通称：振り袖火事）によって失う事となる。大火後、江戸城復興作業の折、本丸殿落成にさきだつて酒井忠勝および老中の面々が、最終工事である天守閣の再建築案について審議した際、将軍家綱の叔父であり補佐役でもあった保科正之は、「天守は近世の事にて、実は軍用に益なく、唯観望に備ふるのみなり、これがために人力を費やすべからず」（『寛政重修諸家譜』より）と主張して天守閣の再建は打ち切りとなった。つまり、もはやシンボルによって武威を示す必要が徳川幕府には無いと幕閣は認識したということであろう。

以下に、補足として天守形式の移り変わりを図のような棒グラフを作成した（fig2-5-3）。対象範囲は天守が初めて作られたと言われる安土城が建てられた天正7年（1579）から、ほとんど天守が建てられなくなった寛永18年（1641）までとした。この図を見ると、望楼型天守が関ヶ原の戦いを過ぎた頃あたりから層塔型に変化してきている事が分かる。

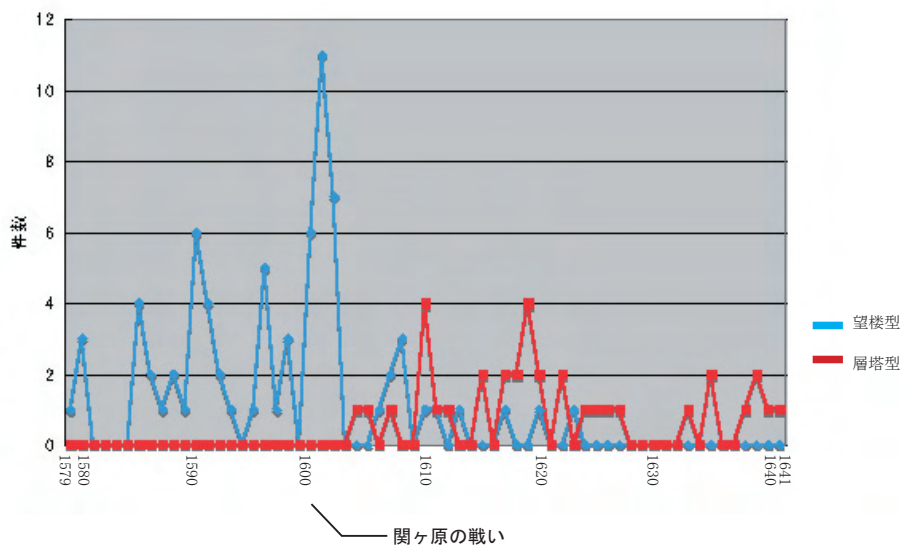


fig-2-5-3 天守形式の移り変わり

2.6. 江戸城の不可視性

天守閣というシンボルの無い江戸城は町人にとって不気味な存在だったのではないだろうか。彼らにとって、敷地の中がどうなっているのか分からないだけではなく、「の」の字型の中心に近づくにつれ規則が厳しくなるような管理のヒエラルキーも存在した。江戸後期になると、江戸城自体を出版物等で描く事に対する規制も生まれてくる事となる。古市夏生が指摘するところによると、享保七年（1722）幕府は江戸城を印刷物に取り上げる事を厳しく制限する触れを出す。千葉によるとその影響は大きかったが、その後も『江戸砂子』のように江戸城を描写する出版物は存在するように、掲載量によっては問題にならないという事もあるという。^(*)24)

千葉正樹：江戸城が消えていく『江戸名所図会』の到達点，吉川弘文館，2007 ^(*)24)

そのような江戸城の不可視性は葛飾北斎の富嶽三十六景の中の一景「東都浅草本願寺」にも見る事ができる。



fig-2-6-1 「東都浅草本願寺」 (『富嶽三十六景』 より)

この絵では、浅草にあった本願寺の大破風を前面に奥に富士山を描き、その間の町並みから凧と火の見櫓が誇張される形で天高く掲げられている。浅草本願寺と富士の間の雲がかかったところには江戸城があるはずであるがこの絵では故意に描かれていない事に注目したい。高いものというくくりの中に江戸城は入らなかったのであろうか。

また、ロラン・バルトは『表徴の帝国』のなかで次のように述べている。

「わたしの語ろうとしている都市（東京）は、次のような貴重な逆説、くいかにもこの都市は中心をもっている。だが、その中心は空虚である。>を示してくれる。禁域であって、しかも同時にどうでもいい場所、緑に蔽われ、お濠によって防御されていて、文字どおり誰からも見られることのない皇帝の住む御所、そのまわりをこの都市全体がめぐっている。（中略）この円の低い頂点、不可視性の可視的な形、これは神聖なる<無>を隠している。^(*)25)」

ロラン・バルト 宗左近訳 : 表徴の帝国, 新潮社, 1974 ^(*)25)

ここでバルトは江戸城があった場所 - 現在の皇居を、「中心は空虚」、「不可視性の可視的な形」という言葉で形容している。彼は西洋の都市の軸線の先にある明確な中心とそこにあるオベリスクや広場など、可視的・象徴的な場の対応関係と対比させて東京の中心を語っている。バルトのいう中心の空虚さは、江戸時代当初からの町人と江戸城の距離感に関する幕府の扱い方が導いたものであると言える。

2.7. 本章のまとめ

本章では既往研究を再編する事で江戸の垂直要素がつくる象徴性のあり方を以下のように考察した。

愛宕山から幕末の江戸を眺めた者の多くが江戸の鳥瞰風景を海や田んぼと言った平たいもので形容した。そのような都市空間は厳しい階数規制、高さ規制が作り上げたのだが、だからこそ逆にシンボリックな高さを幕府や宗教組織が作ることが容易であったとも言える。しかし、実際の都市計画や武家屋敷、江戸城を見ていくと、高さの主張が控えめであるように感じる。特に江戸城の天守閣は当初明らかに見られる事を強く意識したデザインであったにもかかわらず、そのようなモニュメントが明暦の大火後再建されなかったことは本論にとって非常に興味深い。江戸時代後期になると江戸城自体に対してメディア規制がなされますます江戸城は大衆にとって見えなくなっていく。ロラン・バルトが東京の中心を空虚だと感じたのはそのような流れの帰結だと言えよう。以上より天守閣無き後期江戸に特別に際立った垂直要素はなかった事を予想する事ができる。

3. 江戸名所図会を利用した垂直要素の分析

本章では『江戸名所図会』を分析する事で、江戸の垂直要素の象徴性について検討する。

3.1. では、『江戸名所図会』の特徴を明らかにしながら本論でこの資料を扱った理由を示す。

3.2. では、『江戸名所図会』の図版に描き込まれている文字から名所として取り扱われている文字を抽出し類型化、統計をとる。

3.3. では、『江戸名所図会』の図版に描き込まれている遠景を採取し、その風景の中でスカイラインを形成している要素を明らかにする。

3.4. では、3.2、3.3の結果を受けて、『江戸名所図会』の図版に描き込まれている宗教施設における本堂、本社などの中心的な建物、火の見櫓、仏塔、それ以外の方形屋根をもった建築を対象に、その象徴性について考察する。

3.6. では以上の分析をまとめる。

3.1. 江戸名所図会

本論では、江戸後期に出版された『江戸名所図会』の中に描き出された都市空間を対象として、分析を行う。そのため、ここでは『江戸名所図会』の特徴について述べながら本論でこの資料を扱った理由を明らかにする。

3.1.1. 名所とは

名所とは、寺社や古跡など由緒ある場所や、景観のいい場所を巡る行楽の事である。それは一大ブームとなり、数多くの名所案内が出版され、それが更なる名所を生んだりもした。

そもそも、名所はこのような大衆のものではなく、中世では「ナドコロ」と言い和歌に詠みこまれる土地の事であった。そこは「いわば地名と美的感性のイメージが結びついた一種の記号として古代以来面々と続いてきた^(*)」貴族のための名所であった。江戸時代も当初は文人のための場所であったが、明暦の大火以後一新した江戸に急激に流れ込んできた部外者のための実用的な名所案内書を経て、大衆的な行楽としての名所へと達する。

3.1.2. 江戸名所図会概要

前節で述べたような名所ブームを背景に出版された名所案内の決定版とも言えるのが『江戸名所図会』である。

『江戸名所図会』は江戸神田雉子町の名手斎藤幸雄、幸孝、幸成（月岑）の親子三代が40余年の歳月をかけて完成させたものであり、全七巻二十冊千百十一丁項目数千四十四にも及ぶ大著である。その範囲は実際の江戸を超えて武蔵、相模、下総を含む非常に広域な物となっている。挿絵は長谷川雪旦が担当した。

3.1.3. 江戸名所図会の写実性

滝沢馬琴は『異聞雑稿』の中で「この佳妙の画あり、臥遊の為にいといと宜し、この画工雪旦は予も一面識あれども、かかる細画はいまだ観ざりき、縦、北斎に画するとも、この右にでることかたし」と、雪旦の絵の細かさを評している。

作者の月岑も「附言」のなかで「凡そ神社仏閣神社仏閣の幅員方域を図するには、専ら当今の形勢を模写す。かつ地図の間に、四時遊観の形勢を絵くにその態度・風俗・服飾・容儀、これ亦当今の形容を図す」とあり、制作態度にも写実性を重視する姿勢が伺える。

多くの研究者は『江戸名所図会』の写実性をある程度認めつつ、その非写実的な描写に関しても指摘している。

鈴木章生：江戸名所と都市文化，吉川弘文館，2001 ^(*)

例えば、千葉は『江戸名所図会』を史料として使用する上での以下のような注意点を挙げ、『江戸名所図会』の非写実的な要素を指摘している。^(※27)

1. 発刊時点で現況が変化している場合がある。
2. 月岑が表現者の欲求から、実際の空間を演出的な空間に若干変化させて描写している場合がある。
3. 情報量を増やす為に、遠景の図像で人物が認識できる程度に拡大されている場合がある。
4. ある場面に登場する人物の身分・性別・年齢などの属性に一種の理想化が行われている場合がある。
5. 同様にある特定の場が描き込まれなかった可能性がある。

2、3に関しては、名所図としての特性を強調する形で起こるデフォルメであり、4、5に関しては著者の作品に対する態度によるデフォルメである。作品に対する態度、理想化によって描かれなかった事柄として、江戸城、火災、目明かし、武士の抜刀、事故などが挙げられ。この事は、制作者が『江戸名所図会』を「繁栄・静謐・調和の江戸」として描こうとした事によると千葉は指摘する。ただし、江戸城が描かれなかった事に関しては、前節でも述べた江戸城のメディア規制を江戸の名手である制作者が考慮したものであるという意見が多くをある。

3.1.4. 写実的な俯瞰描写

また、『江戸名所図会』には非常に写実的な俯瞰描写が多い事に気付く。同じ日本橋を描いている、江戸初期の名所案内である『江戸名所図記』と比較するとその図としての性質は両者で大きく異なる。



fig-3-1-4-1 「日本橋」
(『江戸名所図記』より)

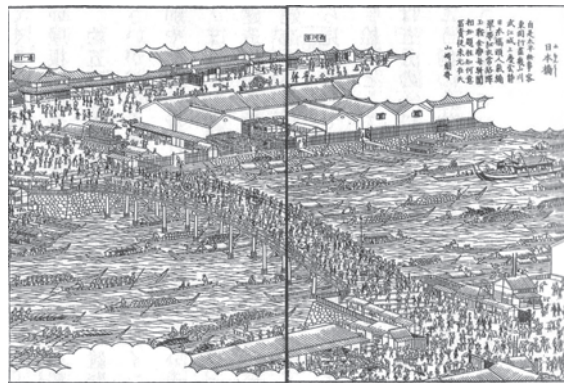


fig-3-1-4-2 「日本橋」
(『江戸名所図会』より)

これは、名所案内の実用性に対する需要の高まりから、地図と絵画の両特性を併せ持った俯瞰図が適していたからだと思われる。この俯瞰図の大量掲載によって『江戸名所図会』は他の名所案内に比べ情報量が非

千葉正樹：江戸名所図会の世界，吉川弘文館，2001 ^(※27)

常に多く人気を博した。

3.1.5. 大衆を描いた大衆の為のメディア

巻頭の次に登場する「江戸東南の市街より内海を望む図」では江戸城上空あたりから江戸城が入らずに町人の町を描いたものである。これは『江戸名所図会』の数ある俯瞰図の中では最も高所からの大俯瞰図である。「雪且が描く江戸の風景には、常に江戸の町や町人をみていこうとする意識で一貫されており、江戸の町を江戸城に向けた形で描くことはなかった。」と鈴木が指摘するように、この絵から『江戸名所図会』が大衆を描き出す事を意識した書物であったと言えそうである。

また、滝沢馬琴は「その功、編者は4分にして、その妙は画に在り、遠境の婦女子婦女子の大江戸の地を踏むに由なきには、これにます玩具あるべからず」と『江戸名所図会』を大衆のメディアとして評している。

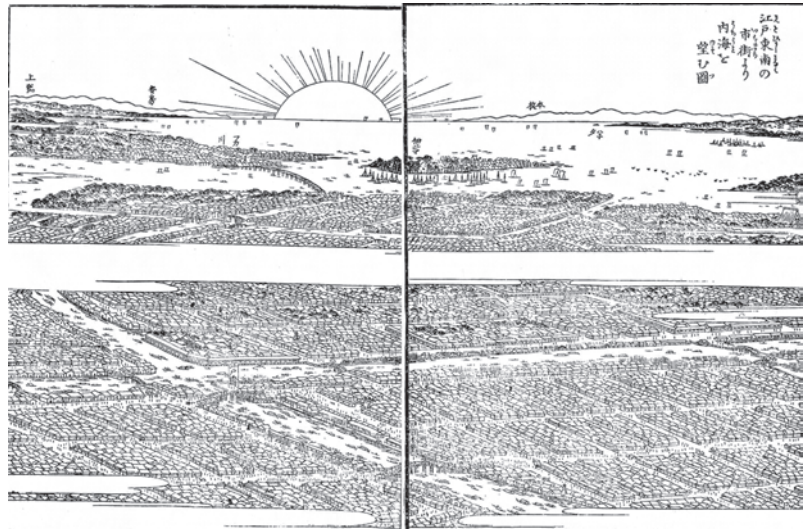


fig-3-1-5-1 「江戸東南の市街より内海を望む図」 (『江戸名所図会』より)

3.1.6. 江戸名所図会のまとめ

以上、『江戸名所図会江戸名所図会』の特徴をふまえて、本論において、当資料を対象に分析を行う理由を以下に示す。

- 1 描写の写実性が他の資料と比べて高い
- 2 写実的な俯瞰描写が極めて多い
- 3 大衆の日常を中心に描かれている

1、2は本章での分析対象が都市の垂直要素であることに由来する。3は幕府のバイアスがかかりづらいという点に由来する。

3.2. 名所の類型と分析

本節では『江戸名所図会』に中で名所とされた対象を明らかにするために、まず690枚の絵の表題のみに対して[表1]のように名所の種類の類型化を行った。その名所の種類の類型をもとに、表題・文章から統計をとった。一つの図版から複数個の名所を数える事もある。なお、表題だけを統計の対象としなかったのは、表題を便宜的に図の総称としてつけられる場合が有り、文章の中で具体的な見所となる名所を補足する場合が有るからである。

右にそれをまとめたものを示す。黒字で描かれた名所は人工物に関する名所で緑字のものは自然物に関する名所を指す。なお、「宗教施設」とは寺院や神社などの宗教施設の呼称、「その他」は町や村の名前、行事、歴史的出来事や神話の描写などを指す。

この統計によると『江戸名所図会』は非常に多くの宗教施設を名所として取り上げている事がわかる。「その他」を除いた全体の55%が宗教施設であった。また、「橋」、「川」、「河岸・土手・渡・海辺・塩浜」、「池」、「泉・井戸」など上位の多くは水に関係のある名所で合計すると全体の16%、次点の「店、名産、工場」は4%にすぎない。

この事から、高さが場所を名所とする要因と成り得るかどうかを検討するに際して、宗教施設の重要性が非常に高い事が分かる。塔は唯一「中野塔」という名所として取り上げられた。火の見櫓や城は単体で名所絵の表題と成ったものは確認できなかった。

宗教施設	415
橋	31
店、名産、工場	29
川	29
河岸、土手、渡、海辺、塩浜	27
墓、塚	23
眺望	21
祭り	20
樹木	19
池	18
山	15
坂	15
原、馬場、旧跡、木場	15
泉、井戸	14
林泉、庭	10
通り、道	9
茶屋、茶飯	7
門、戸	6
市	5
林、森	4
石、岩	3
芝居小屋、土弓	3
地藏、大仏	2
駅	2
谷	2
塔	1
丘	1
その他 (場所、行事、名所以外)	166

表1-名所とされるものの類型

3.3. スカイラインの分析

3.3.1. 分析方法

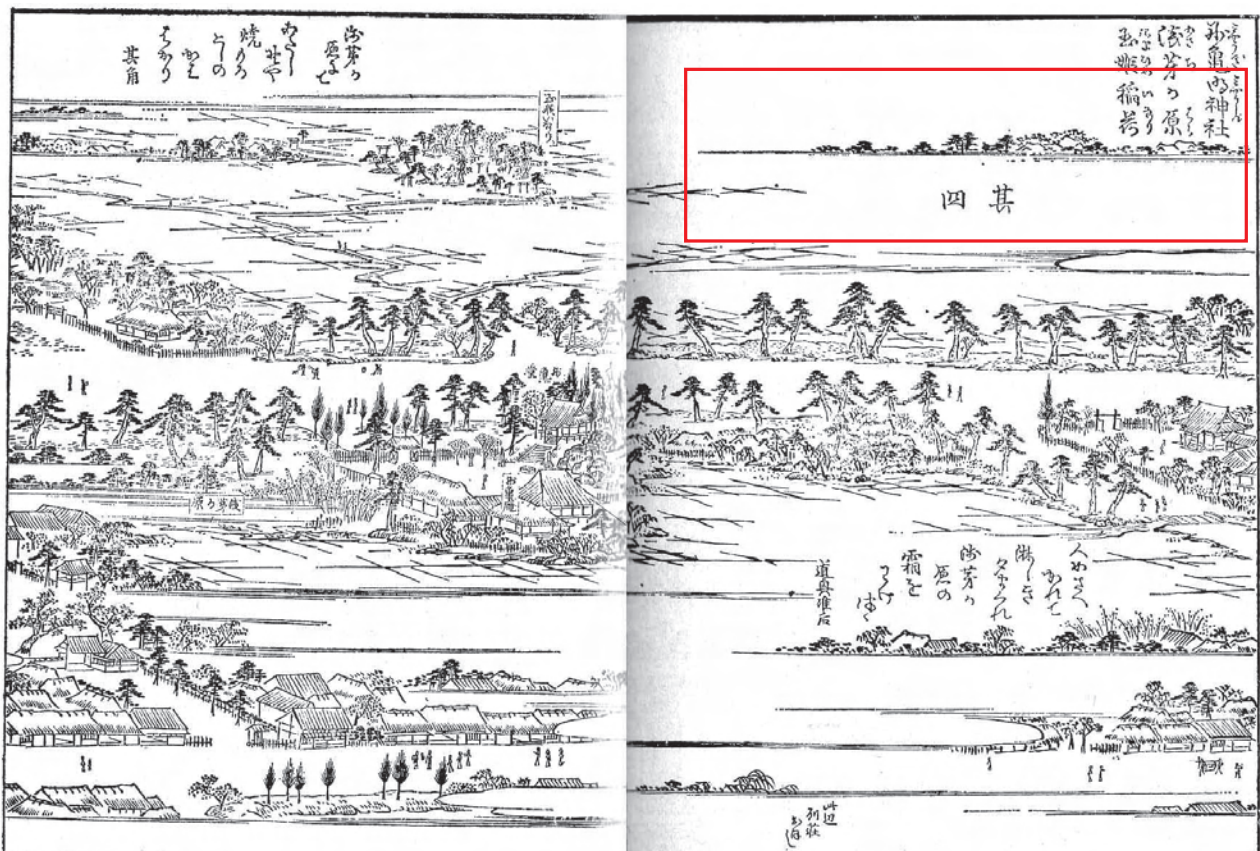
本節では『江戸名所図会』におけるスカイラインを構成している対象を明らかにすることで、実際に垂直要素として見えたであろう要素を明らかにするため、「遠景」と定義づけた描写366枚を対象に主な項目について統計を取った。

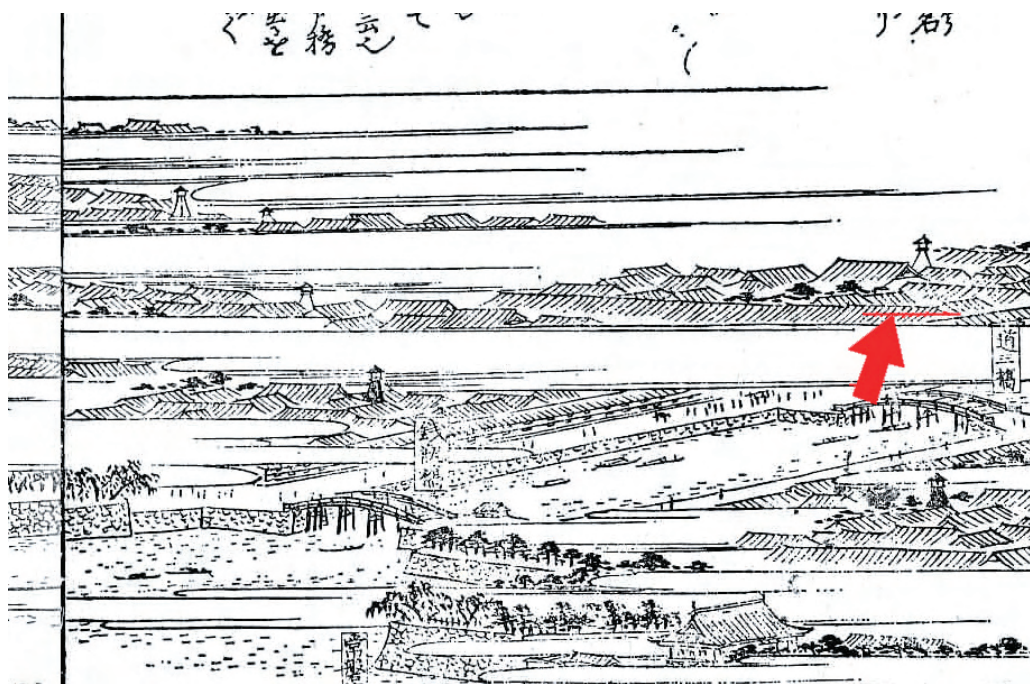
遠景とは雲によって主題の図から切り離された風景、もしくは明らかに図のコントラストを下げる事によって遠くにある事を示している図、縮尺を前面の図と明らかに異なるように描く事によって遠くにある事を示しているものとした。また、雲によって前景と切断されている物に対しても、軒が続いている事が認識できるなど、明らかに奥行きを断絶ではない雲による切断は分析対象から除外した。ちなみに日本画における雲は、遠近法なく奥行きを表現する手法として多く見る事ができる。

この景色の特徴は、鳥瞰的な構図で全体が描かれている図においても立面的に立ち上がるように描かれる事が多いため対象同士の高さを相対評価する際、比較的作者の意図の通りの高さ関係を判断する事ができる事である。遠景の例を下図の赤枠で示す。

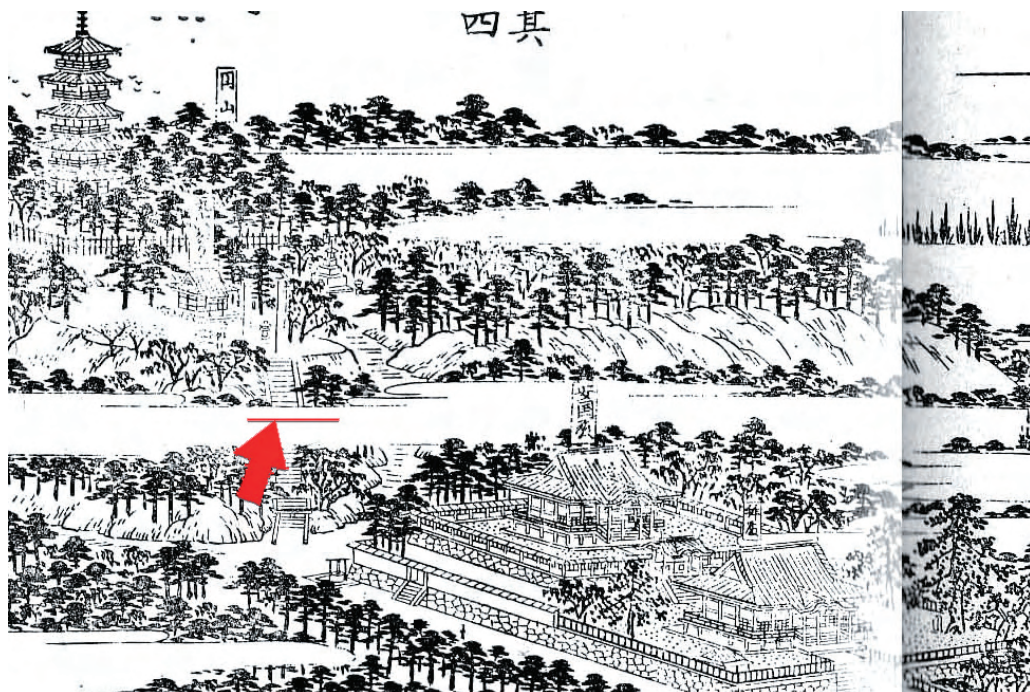
遠景に適す例

赤枠内が遠景である。





雲によって上下を分断されているが、明らかに軒が連続している事が分かる。



雲によって上下を分断されているが、明らかに階段が連続している事が分かる。